

没後二〇〇年最後の武雄領主

なべしましげはる

鍋島茂昌展

会期 平成22年7月17日(土)～8月29日(日)

会場 武雄市図書館・歴史資料館

解説

武雄の第二十九代領主鍋島茂昌(一八三二～一九一〇)は、西洋の学問「蘭学」導入の立役者である鍋島茂義の子として生まれ、満六歳で武雄鍋島家の家督を継ぎました。茂昌の代にも、西洋の学問・技術の習得は続けられ、明治という新時代への変革期に起こった戊辰戦争では、「多年、西洋砲術研究・練兵の趣、聞こし召され候に付」という朝廷からの出陣命令を受け、京都では天皇から錦の御旗を拝受され秋田方面での戦闘に向かいました。武雄が卓越した洋式軍事力を備えており、それが大きな評価を得ていたことの証しとなる出来事です。

明治二(一八六九)年の版籍奉還により、茂昌も他の藩主・領主同様に領主権を失います。しかし、旧領主としての影響力は大きく、明治七(一八七四)年の佐賀戦争では、再三の加担要請を受けます。米欧回覧から帰国したばかりの武雄出身の山口尚芳の諫めもあって出兵には消極的でしたが、佐賀軍の中心である島義勇の強い要請に抗しきれず、ついに六十四名の兵士を佐賀に向け進発させることになりました。島義勇と従兄弟の間柄であった茂昌にとっては苦渋の時でした。

その後、茂昌は明治三〇(一八九七)年に華族に列し男爵を授けられ、同四十三(一九一〇)年に七十七年の生涯を閉じました。鍋島茂昌が没して一〇〇年という今年、武雄市図書館・歴史資料館では「最後の武雄領主 鍋島茂昌」の展覧会を開催します。



官軍忠勇千人之内 肥前鍋島上総(茂昌)様 (個人)



鍋島茂昌肖像
原資料
(武雄鍋島家資料 武雄市)

開館時間 午前9時～午後5時まで

観覧料 無料

休館日 7月20日(火)・26日(月)

8月2日(月)・9日(月)・16日(月)・19日(木)・23日(月)

主催 武雄市図書館・歴史資料館

後援 佐賀新聞社・西日本新聞社・朝日新聞社

毎日新聞社・読売新聞佐賀支局

NHK佐賀放送局・STSSサガテレビ

(株)ケーブルワン・NBCラジオ佐賀

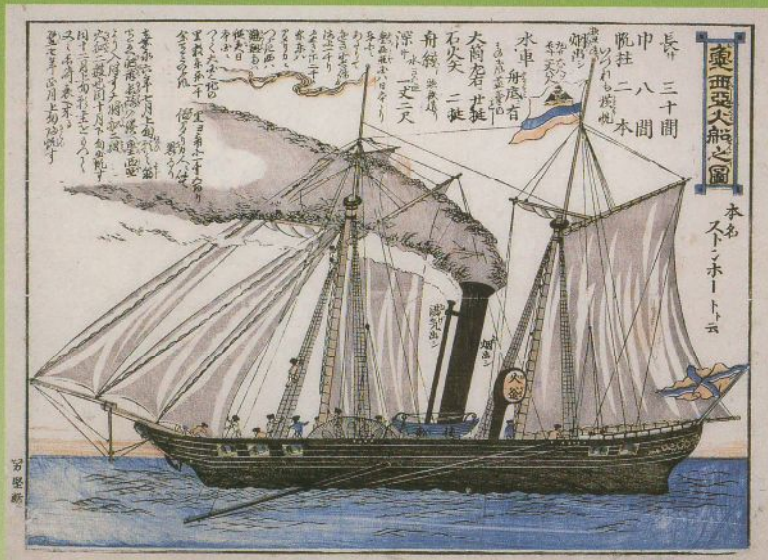
担当学芸員によるギャラリートーク

7月25日(日)・8月7日(土)
8月15日(日)・8月21日(土)

※13:30より開催いたします。

一、家督の相続と長崎警備

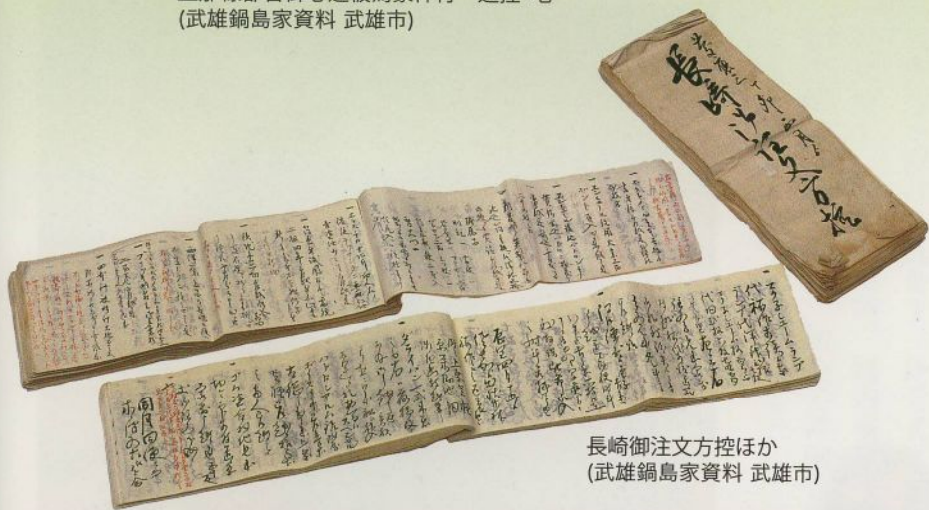
武雄の最後の領主である鍋島茂昌は、天保三（一八三二）年閏十一月十八日に生まれました。幼名、元次郎。通称、上総を名乗りました。父は鍋島茂義、母は佐賀藩の武士、島市郎右衛門の娘知恵で、島義勇とは従兄弟の關係にあたります。天保八（一八三九）年九月一日には、茂義から家督を相続し、満六歳で武雄鍋島家の当主となりました。また、安政六（一八五九）年には、佐賀藩の執政に任じられます。佐賀藩は、江戸幕府の鎖国政策のもと、長崎の警備を命じられていましたが、茂昌は、嘉永五（一八五二）年、長崎御仕組方頭人（長崎警備主任）に任じられ、翌年のロシア使節プチャーチンの来航や、また、その他、外国船の長崎来航に際して、警備のため長崎に赴いたことが古文書などからもうかがえます。



嘉永六年 魯西亜火船之図（武雄市）



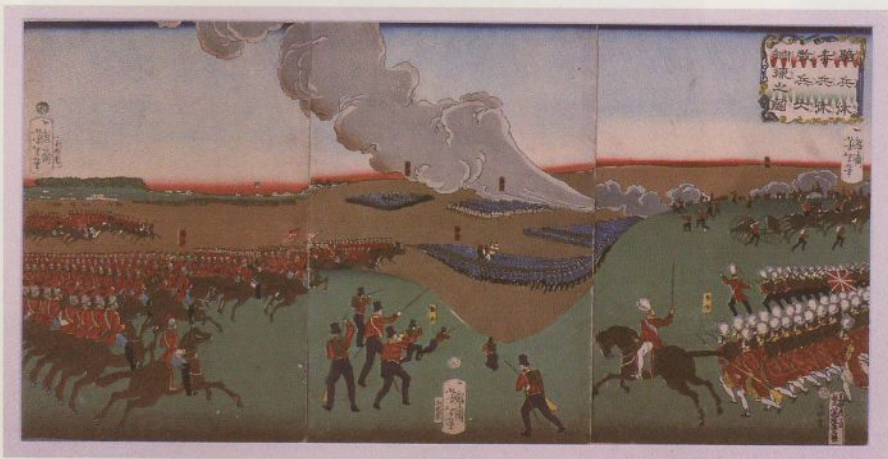
嘉永六年 長崎表異国船渡来ニ付而
且那樣都合御心遣被為蒙仰行一通控 地
(武雄鍋島家資料 武雄市)



長崎御注文方控ほか
(武雄鍋島家資料 武雄市)

二、洋学の受容と軍備の増強

鍋島茂昌が生まれた天保三（一八三二）年は、彼の父茂義が家臣の平山山平（醇左衛門）を長崎の西洋砲術家高島秋帆に入門させ、西洋砲術の武雄への積極的な導入を図った年で、武雄がいち早く西洋の文明に目を向け始めた時期でした。茂昌もまた、父と同様、西洋科学の摂取を進め、特に軍備の増強を図りました。慶応二（一八六六）年の『長崎御注文方控』は、茂義が残した『長崎方控』（武雄鍋島家資料）と同様、武雄の長崎での買い物帳で、種々の器物の注文がなされています。安政六（一八五九）年、および慶応二年には佐賀藩の執政に就任、また、慶応元（一八六五）年十二月の第二次長州出兵にも武雄の兵士を率い出征しました。

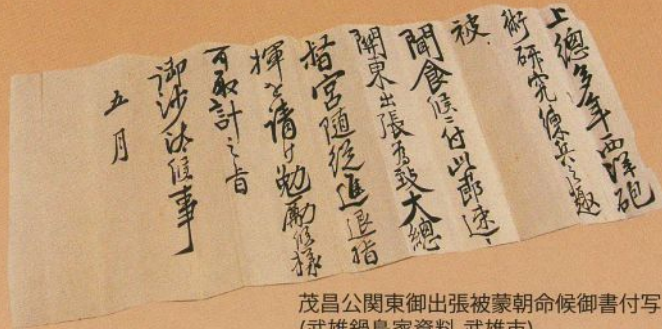


錦絵「調練大隊之図」（武雄市）

三、秋田へ出兵 羽州戦争と武雄

慶応四（一八六八）年一月、旧幕府軍と新政府軍の間で戊辰戦争が勃発。五月、朝廷から動員命令を受けた鍋島茂昌は途中、京都に立ち寄り「其方、武術拔群、且つ兵隊精練の趣、天聴に達し、先般御沙汰仰せ出され候處、此度上着、御満足に思し召され候」という褒詞の勅諭を受け、激励に錦の御旗、天杯、軍扇などを拝領しました。千人からなる武雄隊は秋田へ出兵、茂昌は佐賀藩全軍四千人の総司令官に任命され旧幕府軍との戦闘にあたりました。スペンサー銃・アームストロング砲など最新兵備を擁する彼らの活躍は、敵・味方を問わず人々を驚愕させました。

戦闘の終結後、政府から「余程の強兵」と評され、武雄隊を世情不安定な東京に留めようとする大村益次郎らの働きかけもありましたが、茂昌はこれを拒否。十一月に部隊は武雄に帰りました。武雄で重ねられた砲術の研究・調練は、戊辰戦争で結実。明治という新時代の扉をこじ開けるのに、武雄の人々が果たした役割は大きかったです。



茂昌公関東御出張被蒙朝命候御書付写
(武雄鍋島家資料 武雄市)

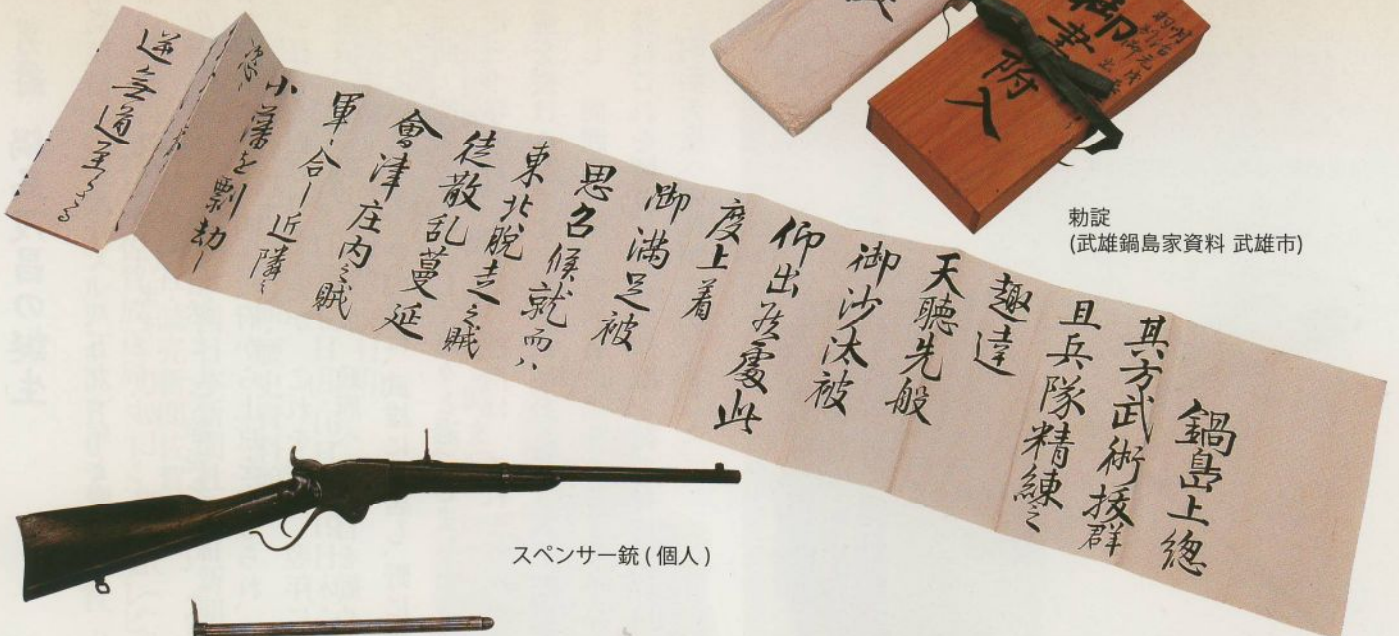


旗指物「家紋」「武」
(武雄鍋島家資料 武雄市)

御本陣旗
(武雄鍋島家資料 武雄市)



勅諭
(武雄鍋島家資料 武雄市)



スペンサー銃 (個人)



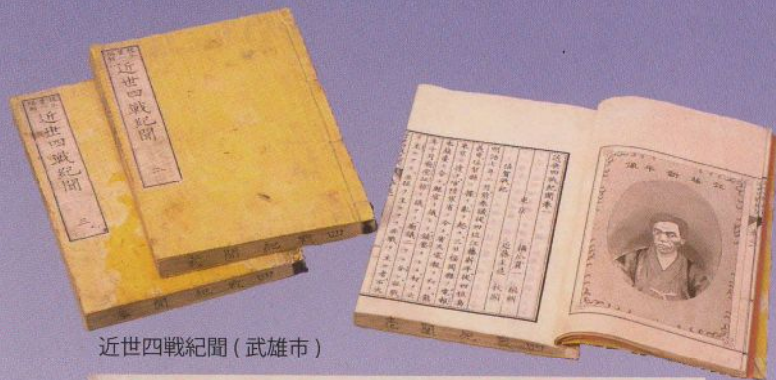
軍扇 (武雄鍋島家資料 武雄市)



大村益次郎書状 (武雄鍋島家資料 武雄市)

四、苦渋の選択 佐賀戦争と武雄

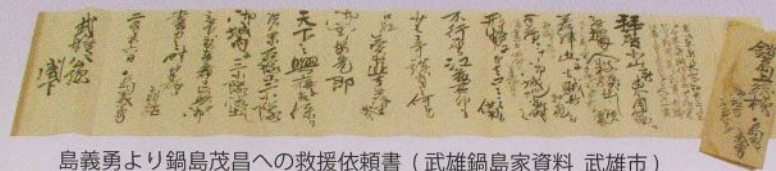
明治六（一八七三）年の征韓論政変で江藤新平が明治政府を下野すると、佐賀では、江藤新平に通じる征韓党と島義勇に通じる憂国党とが結びつき、明治七年二月十五日、ついに佐賀戦争が勃発しました。江戸時代初頭以降、武雄が佐賀藩の支配下にあったこと、また、島義勇とは従兄弟同士であり、さらに茂昌の実弟相良貞経が佐賀藩の重臣であったことから、旧領主鍋島茂昌に対して佐賀軍から元帥への強い就任要請と出兵要請がなされ、結局、六十四名の兵士を佐賀に向け進発させることになりました。しかし一方で、米欧回覧から帰国したばかりの武雄出身の山口尚芳は、騷擾鎮撫のため兵を率いて佐賀城に入城、戦いの鎮圧にあたりました。戦争当初、武雄が出兵の態度を留保し続けた背景には、茂昌に対する山口の諫言があり、また武雄が、戦後、赦免された背景にも、山口の奔走がありました。この時期、鍋島茂昌は非常に微妙な立場に立たされていたのです。



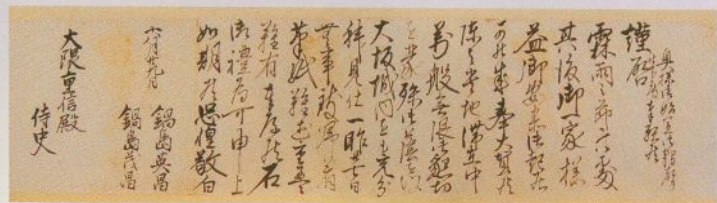
近世四戦紀聞（武雄市）



皇国一新見聞誌 佐賀の事件（武雄市）



島義勇より鍋島茂昌への救援依頼書（武雄鍋島家資料 武雄市）



大隈重信宛 鍋島茂昌・英昌書簡（大隈記念館）

鍋島茂昌は、安政六（一八五九）年と慶応二（一八六六）年の二度、佐賀藩の執政に就任しています。しかし、明治元（一八六八）年暮れ、藩政改革の議論沸騰する中、憤然として辞表を提出、武雄に退いたといっています。また、明治三年、明治政府から上京を命じられ、陸軍兵部大輔という要職への任官を促されましたが、これを辞退。翌年にも、旧藩主鍋島直大や大隈重信、山口尚芳らに再度、政府への任官を勧められましたが、同様に辞退したと伝えます。その後は、武雄に閑居し、野に出ては乗馬を、邸にあっては謡曲・能楽を趣味として悠々と過ごしました。

明治三十年十月二十七日、茂昌は、それまでの勲功により華族に列せられ男爵を授けられます。拜受式にあたり、六十四歳という年令であった茂昌に対し、周囲は当時、宮内省に出仕する子息英昌の代理出席を勧めますが、彼はこれを断り、初めて洋服と靴を身に着け自ら参内して、約三十年ぶりに明治天皇への拝謁を遂げました。

五、男爵 鍋島茂昌の誕生



鍋島茂昌大礼服一式
（武雄鍋島家資料 武雄市）



武雄市図書館・歴史資料館
〒843-0022 佐賀県武雄市武雄町大字武雄5304番地1
TEL 0954-20-0222 FAX 0954-20-0223
URL <http://www.epochal.city.takeo.lg.jp>
mail epochal@epochal.city.takeo.lg.jp